# 小島直記伝記文学全集

# 伝記文学全集

第六卷

苏工业学院图书馆
藏书章

小島直記伝記文学全集　第六巻
定価　三八〇〇円
昭和六十二年　三月十日印刷
昭和六十二年　三月二十日発行
著者　小島直記
発行者　嶋中鵬二
印刷者　小林　清
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替　東京二―三四
©一九八七　検印廃止
ISBN4-12-402586-6

# 小島直記伝記文学全集　第六巻　目次

極道

青春放浪

幕末太閤記 11
母恋い 21
小犬 31
余計者 42
大書記官 53
波紋 64
脂粉 76
試験 87
河内山 97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幕間 108
丸坊主 118
三十三枚歯 129
日本無銭旅行計画 140
色餓鬼 151
誤算 163
ニセ河内山 174
勘当 185
佳人来訪 195
約束 206
京都 217
薬売り 228
体当たり 238
ハプニング 249
蕩ける 260

異変 270
略奪 281
海の彼方
海の彼方 292
ベルリン 302
ハイデルベルク前期 313
渡り鳥 323
黒い館 332
娼婦 344
父と子 355
剣とピストル 366
色男 376
黒と白 387
ながれ 397

決意 407
山男 417
博士号 429
雲にのる
帰朝者 440
辞める 450
花街縦断 461
色男再会 471
二老人 482
ボロ会社 491
誠之助流 501
古狸 513
手さぐり 523
遠謀近計 534

旅先 544
威圧 555
総会 566
来訪者 576
好評 585
相談 595
新会社 605
切り札 615
脅迫 625
月光 636
分配 647
あとがき 658

# 小島直記伝記文学全集

第六巻

極　道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

極

道

# 青春放浪

## 幕末太閤記

江戸幕府はなやかなりし頃、江戸城に近い麹町一帯には直参旗本の屋敷が多かった。その一つ、上三番町青木なにがしの邸宅に郷純造がうつってきたのは、明治元年九月のことであった。「慶応」という年号を「明治」と改め、一世一元の制が定められたちょうどその月である。

翌十月、江戸城は「皇居」となった。

郷純造は、四十三歳。

新政府の会計事務局組頭の地位にあった。二年七月、その役所が大蔵省となると、大蔵少丞となった。そして三年目の五年六月には、四等出仕となっている。

当時の役人は、一等官から十七等官まであった。

一等官は、太政大臣、左右大臣、参議、大将、卿である。

大輔、中将、特命全権公使が二等官であった。

三等官は、少輔、少将、大警視、侍従長、四等官は、大書記官、代理公使、大佐、知事になっている。

一等から七等までが高等官、八等以下は判任官とされた。また、一等から三等までを勅任官、四等から七等までを奏任官ともいう。

つまり、郷純造は大佐、または知事と同格ということになる。「飛ぶ鳥も落とす勢い」とまではゆかないが、事務に精通した能吏ということで役所で珍重されている。

全般的にいって、政府には人材が少なかった。いわゆる「勤皇の志士」たちが、幕府を倒して政権をにぎり、高位高官についたものの、尊皇攘夷であばれまわることと、国を治めるということとは、別の領域であった。

世界列強の仲間に加わって、日本をどういう国家に仕上げるか、その設計図を脳裏に描き得た人物は、ほとんどといっていいほど、いなかった。

新政府早々の最高幹部は「参与」といった。小松帯刀、大久保利通、木戸孝允、後藤象二郎、広沢真臣、副島種臣、由利公正、福岡孝弟と、えりぬきの人材がこのポストについたが、熊本藩の漢学者横井小楠が加わるまでは、新日本建設のビジョンをもつものはいなかったといわれる。

郷純造が、どういう経歴をたどって能吏となることができたかは、追々とあきらかになる。

ともかく、郷は「切れる」。そこで、利にさとい商人たちはしきりと郷邸を訪ね、何かとご機嫌をとってとり入ろうとした。

それは、徳川幕府時代にもさかんに使われた手だ。

その点では、「ご一新」とはいいながら、役人と御用商人、権力と富との基本的関係は変化がないように見える。

土産ものをかならず持参することはいうまでもないが、それだけでは不十分であることを、商人たちはよく知っていた。

そのため、あれやこれやとお世辞をならべてみる。ところがそのうちに、どういう話題がもっとも相手をよろこばせるか、すぐ感づいてしまった。

この元旗本の屋敷は、地所だけで九百坪（約三千平方メートル）もある。
この広大な場所を、郷純造は「五十六両」で手に入れた。
明治四年五月、「新貨条例」という法律によって「一両は一円」ということになったから、郷は「坪六銭二厘」で手に入れたことになる。
当時のゼニの値打ちは、たいしたものだった。つい数年前までは、一両あれば、宿屋どまりをつづけながら「お伊勢詣り」をし、手土産を持って江戸にもどれたのである。
権力体制が変わっても、ゼニの威力は変わっていなかった。
たとえば、朝吹英二、というひとがいる。フランス文学者朝吹登水子さんのおじいさんで、のちに鐘紡専務をへて三井財閥の最高幹部の一人になった人物だ。
この人が、郷里の大分県から大阪まで出てきて、漢学者の学僕となったのは明治二年のことだった。
そして、主人の秘書的業務のほか、飯たき、洗濯、掃除など、下男下女がわりの雑用までつとめて、月にもらったのが一分である。
一分は四分の一両――つまり、月給二十五銭なり、ということになる。
食事つきの住み込みとはいえ、大の男を月二十五銭でこき使うことのできた時代の「五十六円」であるから、
「コーヒー一ぱい飲めんじゃないか」
という今日的感覚からは、その高さはわからない。
朝吹青年にとっては、二百二十四ヵ月、つまり十八年八ヵ月もつかわれて手にする月給総額にひとしかった。
役人の最下等、十七等官の月給は十二円だったが、それでも旦那の暮らしができる、といわれ

たものだ。

とはいいながら、何といっても花の都、一国の首都である。土地の値段はどこよりも高くて、たとえば駿河台あたりで坪一円といわれた。

麹町の番町といえば、駿河台よりもさらに高級な一等地である。それをわずか坪六銭二厘とは、ベラボーに安い。安すぎるのである。

出入り商人たちは、それを主人の腕前、先見の明と交渉上手のせいにした。

「もとは御直参のおさむらいでありながら、どうしてどうして、手前ども、この道にいのちを張る商人が足もとにもおよばぬことでございます。いやはや、まことにもっておそれいりました」

と感心してみせる。あるいは、

「すでに二、三十倍の値段でしょう。地所だけでたいした身上（財産）ではございませぬか」

と、うらやましがってみせる。

そういうことばを軽く聞きながら、郷純造は、その端正面長の顔を掌でなでていた。

「お前たちはそういうが、わしにとっては粒々辛苦の結晶なのじゃ。その金をためようとして、いかに屈辱のおもいをなめ、血の涙をながしたことか、お前たちには想像もつくまい」

「へえー、さようでございますか。殿さまにも、そういうご苦労があったとは初耳でございます。手前どもへの教訓として、なにとぞそのご苦心のほどを——」

「別にお前たちの教訓になろうともおもえぬがの——」

といいながらも、純造はすでに舌で唇をうるおして、大いにしゃべろうと準備している。

「話してくださいまし。どうか、殿さま——」

純造は、しばらく瞑目してから、

「わしの郷里は美濃国でな……」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.